座談会 市長 市内４大学代表者と語る

コミュニケーションを取ろうとするんですね。でもこのグループがあまり育たないんです。だからこの場をつくりたいですね。まず親の教育が必要だと思うんです。

宮　本　児童館をつくると予算もたくさんかかって大変ですから、もっと小さなサテライトのようなものでいいと思うんです。

市　長　親子でコミュニケーションが図れる場ですね。

川　口　今は、「公園デビュー」でお母さん同士のいじめがあるみたいですから、親のケアも必要ですよね。

市　長　やはり子どもと一番長い時間接触があるのは母親ですから、気楽に交流ができる場を考えていこうと思います。

清　水　そうですね。そしてそういう場に「お兄さん、お姉さん」として大学生が参加し、輪が広がっていくというのが理想的ですね。

市　長　先程の児童館のサテライトの発想は、今までいろいろな子育ての論議の中でも出ていなかった発想だと思いますし、大変おもしろいと思います。

清　水　民間にご協力いただいてもいいと思いますよ。大きなお宅を貸していただいて、とか…。

宮　本　そういう場で高齢者のかたと交流を持てたらより素晴らしいですね。人生の先輩として、いろいろなアドバイスもできると思いますし。

市　長　生きがいにもつながりますね。

宮　本　高齢者は一般的に個人的な趣味には一生懸命ですが、一方で他人の幸せに貢献することの充足感というものも持てたらいいと思うんですね。

市　長　いじめ問題については誰に責任があるとは言えないんです。学校や家庭だけにいじめをなくせといっても無理なんです。ただ、時間的に長く子どもが居るのはやはり学校です。だから大学教授など専門の先生と学生を月に1回でも小・中学校を回って実態を見てもらいたいと思いますね。学校と家庭での責任のなすり合いでなく、児童心理学などの面から問題解決に向けてご協力いただけるといいですね。

清　水　そういうことが大学の大きな役割の一つだと思います。臨床心理学のご専門の宮本先生もいらっしゃることですから、そういう場を持って、先生がたとの懇談など現場を見てもらうことが大切だと思います。

宮　本　うちの大学では市内の保育所の先生がたと「根っこの会」という事例研究を月に1度設けていまして、20人位の保母さんと私たち大学の者5～6人で勉強会を開催しているんです。「一緒に考え合おうよ。」ということで、参加しているんですからこういう機会が学校においてもあるといいですね。

市　長　行政やPTA、学校などの会議にも専門知識を取り入れていきたいと思います。

清　水　何かの時に声をかけていただければいいですね。また、そういう場に参加することは、学生にも勉強になると思うんです。

川　口　特に女子学生はいずれ母親になり、介護などの問題にあたる人もいるでしょうから、人生のうえでの参考にもなるでしょうね。

3・女性の社会進出について

市　長　さて、女性の話が出ましたが、女性が本当に力を発揮できる時代はどのようにつくられるのだとお考えですか。

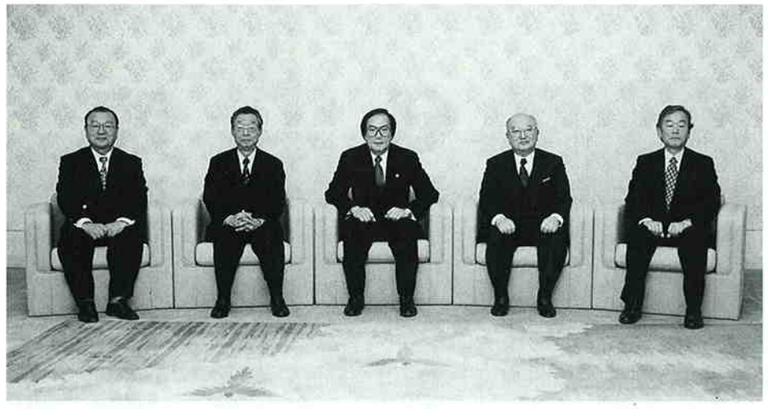
清　水　私は20世紀は男性中心社会だったと思うんです。工業中心ですね。しかし、21世紀は必ず女性中心の、生活重視の社会になると思うんです。今まではきめ細やかな配慮が足りませんでした。だから、これから女性の持つ視点が大切になってくると思います。女性がもっと感性を生かせる職場、組織づくりを再検討していただきたいと思いますね。子どものケアや女性への配慮がもっと地域や社会でもできてくるといいと思うのですが。

市　長　そういった問題については、国にやってもらおうというだけでなく、1つの方法としてダイアプランなど地域の中でやっていくことも必要になってきますね。

清　水　そうですね、ゴールドプランやエンゼルプランもありますがもっと地域の中で身近なケア施設があるといいですね。ですから先程のサテライトもそんな施設であってもいいと思うんです。そうなれば女性がもっと社会的に活躍できるようになりますね。

市　長　少子化問題でも、女性が安心して子どもを産むことができる社会をつくることが必要ですね。

佐　藤　私は調理学が専門なんですが、家政学をもっと男性にも学んでもらいたいですね。国が必要性を認め、今は男子への家庭科教育をやっていますが、現場では形だけだと思うんです。清水先生はどう思われますか。



清　水　まだ男性中心の社会だと思います。だから男性も社会の中で、家庭の中で生きていくことをきちんと理解しないと。

川　口　そしてそのために仕組みづくりも重要ですね。

清　水　それに女性の労働力化ということもありますね。欧米では70～90％の女性が一旦仕事を辞め、育児が終わってからまた職場復帰しますが、それは男性も協力しているから出る数値だと思います。日本はまだまだそういう点で遅れていますね。

宮　本　今、一番自立していないのは男性ですね。奥さんがいなければなんにもできない。だから男性をサポートできるシステム、養育できるシステムなどが必要で、父親の「心理的不在」と言われないようにしたいですね。男性も変わるように努力しなければ。

市　長　市では、市内の企業に職員が出向き、いじめの実態などもお話して「余暇をぜひ家族と過ごしてもらいたい。」と訴えているんです。女性の社会進出において行政に全てを任せて、というのは大変ですから、父親も協力していかないと。またもう一つの問題として、女性のプロ化ですね。女性が社会に出るときにパート的な仕事が多い。これから、生きがいと地域に貢献できるような社会参加がもっとでてくるのではないでしょうか。

清　水　そういう点では、女性の資質向上に貢献する手だてを大学が持っていますね。ぜひ協力したいです。

市　長　資質を育てることを大学の市民講座やセミナーなどでやっていただけるといいですね。

宮　本　核家族化が進む中でどうしても子育ての経験を聞くことがしづらくなっていますから、そういったことを進めるために大きな所ではなく小さい場所で、出前研修のように数多くやっていきたいですね。

佐　藤　高校生を見ていると、いい意味で「女」という意識がないですね。みんな人間としての意識で職業を希望しています。だから進学でも医学部などに進みたいという女生徒が随分増えましたね。そんな意識の生徒が増えてきたということは、あと10年位したら社会の仕組みも意識ももっと大幅に変わってくるのではないかと思いますね。

4・地域における大学の役割について

市　長　さて、話は変わって、高齢者も自分の人格を保ちながら社会へ出ていくということに、大学ではどんなことができるでしょうか。

清　水　そうですね、知識や設備面ということになりますね。

市　長　いろいろ出ていく場をつくってもらって、大学の先生がたに講師などで来てもらえれば、市民の皆さんの意識の面でも違いますね。

佐　藤　市からこんな講演があるからこういう専門の先生を…と言っていただければ、教授のほうもとてもいい経験になると思うんです。特に「家庭生活」の面では清水先生の東京家政大学などは100年以上も歴史のある大学ですから、ぜひ活用できるといいですね。

清　水　確かにそうです。そしてそれは、市からだけでなく、いろいろなグループやサークル単位としての講演依頼であってもいいと思いますよ。

川　口　市民の皆さんに大学に来てもらうと、アットホームになるかもしれませんが、大学独特の雰囲気に違和感があるかもしれませんね。

市　長　それはそうですね。市内のどこかに来ていただくのが一番いいでしょうね。そして聞いた人もきっと帰ってからみんなに話をすると思うんですよ。全体がいい雰囲気になると思いますね。

佐　藤　話は変わりますが、大学が地域にできることとして、地震などの災害時のために敷地内に防火水槽などの設置をしてもらってもいいと思うんです。敷地の提供ですね。

市　長　ありがとうございます。大学の片隅にでも防火水槽や備蓄倉庫などを設置させていただいたり、また広大なキャンパスですから災害時には市民の避難場所ともしていただけたらと思いますね。

清　水　そうですね、それに私たちはいろいろな県から来る学生に、狭山の文化に少しでも触れてもらいたいということで、そういうことを大切にしているんです。

市　長　そうですか、これからも市内の4大学の皆さんのご協力をいただき、さらに狭山市の教育行政を素晴らしいものにしていきたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。それでは今日は大変お忙しい中、4人の先生がたには本当にありがとうございました。